

2013年5月19日 ペンテコステ礼拝説教（要約）

聖書 ヨハネによる福音書 14章 15～24節

「真理の霊に守られて」

日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

ヨハネ福音書は、他のマタイ、マルコ、ルカの福音書とは少し構成や趣の違う福音書ですが、その特徴の一つとして、主イエスの十字架を前にした記事の中で、14～17章にかけて主イエスの告別説教と祈りが記されています。そして、この説教の中で、主イエスは後に残していく弟子たちに対して聖霊の約束を繰り返し語っておられます。今日の箇所はその最初のものです。

主イエスは、この最後の説教を語り始められるにあたって、私は「あなたがたに新しい掟を与える」と言っておられます。それは、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」ということです。この内容は、もちろん古くからの掟です。けれども、今主イエスをご自身のいのちを捧げ、神の愛をはっきりと現してくださることによって基礎づけられた戒めですから、新しい掟と呼ばれるのです。「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」（23節）と言われるのも、この新しい掟に生きることに他なりません。

ところで、主が残してくださった愛の掟に生きるように招かれた私たちですが、この世は私たち人間の罪と悪の力がうごめく荒野です。いくら私の残した言葉の通りに生きたらよいと言われても、これまでのように主イエスのお姿を見ることができず、主の声を聞くことができなくなってしまうことは、どんなに心細いことでしょうか。私たちはどのようにして、愛に生きえない自らの弱さと罪と戦い、乗り越えていったらよいのでしょうか。そんな私たちのために、主イエスはここで大切な約束を語りだされます。それが聖霊の約束です。しかも、ヨハネによる福音書は聖霊のことを、2つの特徴ある言葉で紹介してくれています。

一つは「弁護者」です。ギリシア語でパラクレートスという単語で、「側に呼び出された者」、「傍らに一緒に立ってくださる方」ということです。敵対するものたちに囲まれて、そこにいつも自分のことをよく知り、かつ弁護してくれる方がいてくれたら、どんなに心強く幸いなことでしょうか。「別の弁護者」とあるように、そもそも主イエス・キリストご自身が私たちの弁護者でいてくださいました。「別の弁護者」とは、主イエスの働きを引き継ぎながら、いつまでも私たちと一緒にいてくださり、働いてくださる方です。

もう一つの言い方は「真理の霊」です。すでに主イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である」（14：6）と言われましたが、これは、真理そのものであるイエス・キリストに私たちを導き、私たちをイエス・キリストのもとに留まらせ、私たちをイエス・キリストにしっかりと結びつけてくださるのです。

このように、聖霊は弁護者として、真理の霊として、私たちと関わり、私たちの内に臨んでくださる神です。主イエス・キリストは地上の働きを終えられた後も、私たちを放置されず、聖霊において私たちと共にいて、私たちを生かし、導いてくださいます。私たちはこのような神、父・子・聖霊なる三位一体の神のご支配のもとにおかれているのです。三位一体とは、聖書には出てこない言葉ですが、古代教会が産みだした大切な教理です。唯一の神が、父・子・聖霊という三つのあり方で私たちに臨み、関わり、私たちの救いのために働いてくださるといふ神の奥義を表しています。人間の論理では説明しつくせない神の真実を人間の言葉で表現しようとするとき、最後は、そうとしか言い表しようのないぎりぎりの言葉です。私たちは、三位一体の神の豊かさと確かさに支えられているのです。洗礼式は父・子・聖霊の名によって行われ、礼拝毎に私たちは、父・子・聖霊なる神によって祝福のうちに遣わされるのです。私の決意でも決心でもなく、神の確かさのもとに私たちは置かれているのです。

別の弁護者、また真理の霊である聖霊を約束してくださる主イエスは、「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻ってくる」(18節)と言われます。これは、主イエスがまず復活して来てくださるということであり、第二に、主が聖霊において来てくださるということです。もはや、この世は肉の目によって、主イエスを見ることも知ることはできなくのですが、主に招かれた弟子たちは、肉の目で見るよりも確かにはっきりと、生ける主を見て、信じ、愛することができるのです。

昨年秋から礼拝で読んでいるペトロの手紙一には、「あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせないすばらしい喜びに満ちあふれています」(1:8)とあります。ペトロは、主イエスと一緒に過ごした自分が、主イエスのことを理解できず、裏切ってきたのに、今や主イエスを地上で見たこともない世代の人たちが、福音の言葉を聞いて、主イエスを信じ、主イエスを愛し、喜びに満ちて過ごしている、これは何と驚くべき、すばらしいことか、と言っているのです。主ご自身の贈ってくださった霊の豊かな働きを讃美せずにおれません。

「あなたがたは私を見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる」(19節)。聖書の御言葉が心に留まるとき、私たちが心の中で小さな声でも「アッバ、父よ」と神の名を呼び始めるとき、そこにはもう確かに主の霊が、主ご自身が来てくださっているのです。すでに、主の愛といのちの中を生きはじめています。

私たちは、三位一体なる神のご支配の中に生かされています。主キリストの霊は、「弁護者」また「真理の霊」として、この私にも与えられています。この幸いの中を一人でも多くの人たちと共に歩んでいきたいものです。